

# 「子どもを守る」セーフティネットを強化します Approach

## 子どもの“もしも”に備える 子どものSOSをキャッチする

子どもの心から体を傷つけること、それが暴力です。暴力は少しずつ深刻化し、生きていくのに絶対に必要なもの一人権を侵害していきます。無力感のなかで、子どもの多くは被害を語りません。

暴力とは何かという認識がバラバラで見逃してしまう・・・  
 どうしたらいいのかわからず、聞かなかったことにしてしまう・・・  
 子どものSOSをキャッチできず、見過ごしてしまう・・・  
 起きてしまった出来事に慌ててしまい、対応を誤ってしまう・・・

そういったことが起こらないように、予め、知識とスキルをもって備えるのが予防教育。CAPは、おとなを対象に子どもの権利を基盤として、いじめ・誘拐・連れ去り・虐待・性暴力など、子どもが受けるかもしれないあらゆる形態の暴力に対する知識とスキルを提供し、子どもを守るおとなのセーフティネットを強化することから始めていきます。

### 予防

- ①未然防止
- ②発生防止
- ③悪化防止
- ④再発防止

## リスク・マネジメントと クライシス・マネジメントに



子どもにとくべつに大切な3つのけんり

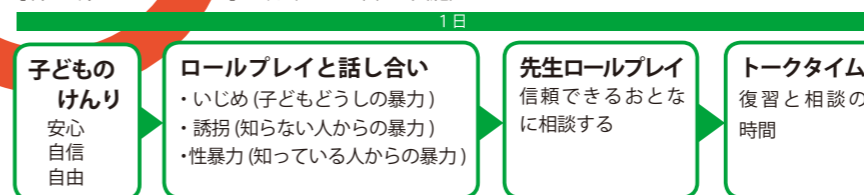


「あんしん」「じしん」「じゆう」

# 学童期の子どもへの予防教育 Workshop

## 子どもの権利を基盤とした子どもワークショップ

[約70分+トークタイム] 1日 (クラス単位で実施)



※トークタイム：子どもワークショップ直後に子どもがCAPスタッフと個別に復習・練習する時間。(約30分)



## 楽しみながら、主体的かつ能動的に考え、話し合い、深める子どもワークショップ —学び合いのなかで子どもたちの持つ力がイキイキと活性化する時間—

- 「自分は大切な存在」(人権意識)だと気づく機会となる
  - 被害者・加害者・傍観者のいずれにもならないために、“もしも”のときの考え方、スキルを持つ(行動の選択肢の広がり)
  - 子ども同士の助け合いを促進する
  - 困ったときは他の人の力を借りていいこと、おとなに相談することを意識化できる
  - 「やってみたい!」「やってみよう!」という意欲が高まる
- ・・・など

## 学童期の子どもとおとなの漠然とした不安を減少させ、まちに安心を広げるCAP

# おとなと子どもが共通認識を持ってこそ 効果的な予防が可能に

## 子どもとおとなが協力して「子どもを守る」を実現するプログラム

いくら心配でも、おとなが24時間一緒にいて子どもを守ることはできません。また、家庭だけ、学校だけ、地域だけで子どもを守ろうとすることには限界があります。CAPは、家庭—学校—地域の三者が一体となって子どもの安全を支えていくという考え方に基いて開発されました。

「子どもを守る」主体は、子ども自身です。

子どもたちは決して無力ではありません。大切な自分を守る力、友だちを守る力を持っています。ところが、子どもたちは自分は大切な存在と思う感覚(人権意識)を持てなかったり、何ができるかを考えるための知識・スキルを学ぶ機会から遠ざけられてきました。そこで、子どもたちがもともと持っている力を発揮できるように子どもの権利を基盤とするアプローチで知識とスキルを提供し、子どもとおとなが共通認識・共通の言葉を持って、協力して「子どもを守る」を実現するのがCAPプログラムです。

誰にとってもわかりやすく、だからこそ毎日の生活で継続して一緒に活用できる、それが効果的な予防につながります。



今までは、友だちがいやなめにあっても、自分とは関係ないと思っていたけど、これからは友だちの力になりたいと思った。(小学5年生)

毎年継続して学校単位で実施することで、常に学校全体で共有でき、自分だけだと自信の持てない対応も相談できる環境が生まれた。(教職員)

心が元気になった。(小学3年生)

今まで見えなかった子どものサインに気づいたり、周囲の先生方から情報を得たりすることができるようになった。(教職員)

相談することがとても大切だとわかった。自分の身を守る方法が分かったと思う。(小学4年生)

「けんり」の概念を子どもにわかりやすい表現で伝えていたことが印象に残った。(保護者)

一年に一度、エンパワメントや子どもへの暴力防止について考える機会が持て、教員間で話することができるのは、校内の体制作りのためにもとても役立っている。(教職員)

学校から一人で帰っていると、軽トラックに乗った人に「おかあさんが入院したから連れて行ってあげる」と腕をつかまれた。特別な叫び声を出して逃げることができた。(小学3年生の先生からの後日談)

「交通安全教室」や「防災訓練」のように定期的に行われると良いと思う。(保護者)

とてもわかりやすいお話で、子どもとの向き合い方を、もう一度考えてみようと思った。(保護者)